

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 27 回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日 付：11月27日（水）【1日目】

大学名：北京師範大学

氏 名：李珂

この日の正午、私たち一行は北京首都国際空港で集合した後、引率の先生と共に ANA（全日空）の便で大阪・関西国際空港に向かった。また出発の前に私たちは全日空から、「I love ANA」とプリントされたエコバッグと可愛らしい ANA のロゴが入った飛行機の模型をいただいた。

以前面接の際に、日本語学科を選んだ理由は日本料理が好きだからであると述べたことがあった。そのため私の最初の日記では主に日本における美食の旅について記したいと思う。

まず私はプレートの上に和風の定食のように料理が小分けされた機内食に驚喜させられた。ごまだれであえたエノキと青菜の惣菜はとても美味しかったが、残念ながら分量がわずかだった。

夕食は大阪の「時鮭」ですき焼き定食を堪能した。すき焼きは私が最も好きな日本料理の 1 つだった（前の面接の際にもこのことを述べた）が、日本に到着して最初の食事がすき焼きだとは思っても寄らなかつた。

以下は日本のすき焼きに対する私の感想である。私が以前中国で食べたことがあるすき焼きと比べ、日本のすき焼きはスープが濃厚且つさわやかで甘みがあり、牛肉がより厚く、食感もしっかりしていた。鍋の中の緑色のややパサパサした野菜はこれまで食べたことがなく、中国では一般的に春菊やほうれん草が使われる。最も意外だったのは鍋の中の「日本の豆腐」で、柔らかさがありつつも歯ごたえもあり、中国で使っている千枚豆腐に比べスープがたくさん染み込むなど、このすき焼きの中で個人的に最も美味しい食材であった。

最後にこの日の夜の宿泊体験に関して述べる。日本に来てから、中国と異なる多くの部分を感じたと言うよりは、むしろ多くの新たな生活設備の機能を発見したと言える。ベッドサイドライトや特にトイレには様々な機能のボタンが 6 つもあり、これには生活における細部に特にこだわり設備の機能を充実させ、生活の質を高めるという日本社会の特徴が感じられた。私のように初めて日本を訪れた人がこうした体験をした際はきっと、最初は驚き、次いで「なるほどこういうことか」と思い、最後には気付かないうちに「これは本当に便利」だと感じるであろう。

今回の日本訪問では大阪での一晩のみが 1 人 1 部屋で、バスルームの使用に関して他の団員と時間を調整する必要がなかったため、私は待ちきれずお風呂を体験した。お風呂は温かくまた湯船に浸かっていると筋肉がお湯の中でゆっくりとほぐれ、特にこの日移動で疲れた脚の張りが不思議と温かさに満ちた浴室内に消え、20 分後に湯船から出ると脚は夕食時の梅の漬物のように紫がかかっていて、軽快に歩くことができるなど、脚の状態が良くなった。

就寝前、私はベッドに横たわり、夕食時の日本の新米の香りを心地良く思い返しながらかこの日記を完成させた。

日 付：11月27日（水）【1日目】

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：喬彬

今日は自分の人生において特別な、初めて日本を訪れる日である。对外経済貿易大学日本語学科の 2 年生である私は、以前より日本に憧れを抱いていた。そして今日ついに日本の地を踏むことができるため、心の中は興奮と好奇心に満ちていた。そして午後、全日空の便で出発することになったが、搭乗の時点ですでに日本式サービスの細やかさと温かさを感じる事ができた。乗務員の笑顔からはとても親しみが感じられ、その一挙手一投足にはプロの精神と気遣いが現れていた。また料理の盛り付けからもこだわりが感じられ、たとえ機内食であってもその見た目は非常に上品であった。飛行中、窓の外の雲海は綿あめのように柔らかそうで、日差しの下で金色に輝くなど、まるで童話の

世界に居るかのようだった。私は座席に座り風景を見ながら、間もなく始まる日本での旅について思いを巡らせたが、興奮のせいで思いは尽きなかった。

夜、私たちは無事日本の空港に到着した。時間がすでに遅かったため、私たちは空港近くのレストランで夕食をとった。驚いたことに、日本での最初の食事はすき焼きであった。店員が運んできた際の濃厚なスープの香りは瞬間に私の食欲を刺激した。ぐつぐつと鍋の中で煮込まれた柔らかな牛肉、滑らかな豆腐や様々な新鮮な野菜、そして甘めのタレが合わさることで、本当に美味しい鍋となっていた。私はまた煮込んだ牛肉を生卵につけて食べてみた。食べる前はやや迷ったが、食べてみると口当たりがとても滑らかで、味わい深く感じられた。こうした食べ方は個人的にとっても目新しくまた面白く感じた。食事をしながら皆は日本に対する第一印象について語り合ったが、皆それぞれ日本のあらゆる部分に新鮮さを感じていた。

食後はホテルに戻り休息となった。ベッドに横たわり今日のすべての出来事を思い返したが、依然として夢を見ているように感じられた。初めて日本の航空会社の飛行機に乗り、正真正銘の日本式サービスを体験し、本場のすき焼きを堪能したなど、これらすべての「初めて」に私はこれ以上ない幸せを感じた。これから先の数日間でより多くの新たな体験ができることを考えると、私の期待はより高まった。

以上が私の日本での初日であり、わずか数時間だがすでにとても印象深いものとなった。これから先の数日間でこの国の文化や魅力をより深く感じられることを願っている。

日 付：11月28日（木）【2日目】

大学名：清華大学

氏 名：熊宝博

今朝はホテルで和風の朝食を体験した。自分にとって朝食にお米を食べることはこれまであまりなかった。味噌汁は自分的にややしょっぱく感じるものだが、日本人は本当にこの味噌汁が好きなのだ今回改めて気付かされた。千年の古都、京都の朝の光景の中、私たちは島津製作所を訪れた。そこでは人事部人財開発室副室長、中国人職員1名及びその他の職員から熱烈な歓迎を受け、さらに同社の分析計測機器に関する紹介をいただいた。島津製作所の理念は科学技術で社会に貢献するというもので、この社には強い感銘を受けた。目まぐるしく変化する現在の世界情勢において、大型の科学研究機関がこうした初心を守り続けているのは並大抵のことではなく、この点は私たちが学ぶべきそして再認識すべきものとなった。その他、代々の島津の人々は懸命に科学研究における最高峰を追求しており、100年以上前の有人軽気球の独自開発から、その後沢山生まれた日本初ひいては世界初の研究成果、そして2002年に田中氏がノーベル化学賞を受賞するに至るまで島津製作所は歩みを停めることなく、常に発展やブレイクスルーを続けていた。清華大学の学生、特に基礎科学分野を専攻する者として私たちは自身の研究に関する写真をどのように描くべきなのだろうか。これまでの自身の体験から言えば、科学研究には根気が必要なだけでなく、蓄積による量的変化を質的变化に変える閃きが必要であり、これには任重くして道遠し、と感嘆を禁じ得ない。幸いだったのは、島津製作所のヘルスケア関連拠点であるKYOLABSにおいて、科学研究や技術革新を推進する別の方法であるオープンイノベーションの様子を目にすることができたことである。島津製作所は協働、共有、共創との研究環境を構築し、実験プロセスを可視化そしてオープン型にすることで、より多くの人に協力への参加を呼び掛けている。夏休み期間に私はケンブリッジ大学の分子生物学研究所 LMB や Francis Crick Institute 等の生物科学分野におけるトップの研究機関を見学したが、そこでも同様に研究者間の交流と協力、特に異なる分野間の意思疎通がとても重視されていた。

お昼は本場の日本料理を堪能した。お刺身や京都ならではの豆腐等、日本料理はとても上品に作られている他、使用している食器にも古風な趣の美しさが備わっていた。そして午後、私たちは京都大学に向かい、到着後はまずキャンパスを見学した。そこでは時計台と80年余りの歴史を持つクスノキが印象深かった。次いで京都大学の先生から同大学の校風に関して簡単な紹介があったが、これは実のところ午前に見学した島津製作所と呼応するものであった。京都大学の教員や学生らは国に対する概念にあまりとらわれていないようで、より多くの精力を研究に注いでお

り、且つ本当の意味で献身的な精神を備え、1つの小さな分野で何十年も研究を続けることができる。京都大学の学生らとの交流はとても楽しく、私たちはグループ討論のテーマ以外にも学業や生活、将来のプランといったことについても語り合った。皆はとても友好的で、これには我が家に戻ったように感じられた。残念だったのは楽しい時間は常に短いということであり、私たちは彼らとお別れせざるを得なかった。幸運だったのは、お互いに連絡先を交換できたことで、今後も深い交流が続けられることを確信している。

日付：11月28日（木）【2日目】

大学名：中国石油大学

氏名：賀雨欣

・島津製作所

共創ラボの理念は個人的に最も驚いたと同時に共感できた部分であった。かつては大部分の先端技術は独占的であり、1つのわずかな技術の不備によりサプライチェーンの断裂を引き起こしていた。しかし島津製作所は本社にわざわざ共創ラボを設立し、開発中の技術を展示している。職員からの紹介によると、その目的は皆の思想をより良くぶつけ合うことで製品をより早く市場に投入するためとのことであった。島津製作所が現在においても依然として「科学技術で社会に貢献する」との社是を実践していることを、この点は良く証明していると思つた。

同社のDESIGN JAMに展示されている書籍に関しては、開発者により多くの他分野の知識をもたらすため専門の人員が厳選しており、ファッション分野の書籍も置かれていた。こうした点も共創ラボにおける「共創」であり、共創とは絶対に人と人の交流が必要という訳ではなく、書籍内の思想と交流することでも可能であると感じた。

・京都大学

まず京都大学で地理学を専攻するMoriiさんからキャンパスを案内してもらった。キャンパス全体はとても大きく、中国と異なる部分としては、彼らの大学では実験室や教室がほぼ一緒になっていて、講義棟は学科別に区分されると同時に、至る所で彼らの日々の学生生活が様々なポスターにより紹介されていた。その後の京都大学に関する紹介の場においても、国のために貢献するのではなく、学外からの束縛を受けず、学内で1つにまとまる同大学の特徴である「自由」について詳しい説明があった。ここでは自分が正しいと思う思想について好きなように表現できる他、特定の物事のために「無意味」かもしれないあらゆる学術研究を十数年ひいては何十年も行うことができる。これこそが日本のモノづくり精神の表れであり、『菊と刀』では、日本人が途中で何かを諦めた場合は他人から軽んじられると書かれている。私は、こうした観念がすでに彼らに浸透していることから、彼らは他人の理解やいかなる理由も必要とせず1つの事を結果が出るまでこつこつとやり遂げることができるのだと思つた。これは、リズムの速い現代社会において私たちが大いに学ぶべき点である。

その後の討論では京都大学のMoriiさんそしてKotaさんと親交を深めることができた。夕食の席においても一緒に「立食」を体験し、互いの生活習慣や文化における相違点について語り合ったり冗談を言い合ったりしたことで、自分のこれまでの日本人に対する慎み深いとの固定観念に変化が生まれた。今日の午前には訪問した島津製作所人事部人財開発室の副室長さんとてもユニークで面白い方だった。そのため、1つの国や文化を知るための最良の方法は、やはり現地の人と交流することだと思つた。

日付：11月28日（木）【2日目】

大学名：北京語言大学

氏名：楊蘊涵

今日は大阪から千年の古都である京都に向かった。窓から早朝の大阪の様子を目にしたが、色彩がとても美しかった。道端には秋の紅葉が残っていて、道路は風情に富んでいた。その後島津製作所では同社の先進的な技術と医療設備製品について知見を得た他、博物館を見学しさらに分離技術を体験し、とても衝撃を受けた。日本企業の製

品や運営方法について知見が深められたのは非常に特別な体験であった。

お昼は懐石料理を堪能し、日本料理の色彩の美学と庭園の風情を体感した。午後は京都大学に向かい、美しいキャンパスや特徴ある吉田寮等を見学した。また講座を拝聴し、京都大学における自由の学風を体感した他、京都大学の学生らと友好的な交流を行い様々な見解が得られたと同時に、楽しい会話を通じて一部の学生と親交を深めることができた。

日 付：11月29日（金）【3日目】

大学名：北京師範大学

氏 名：杜佩桐

朝食を済ませた後、私たちはバスで高台寺に向かい、日本の座禅と茶道文化を体験した。この日の天気はとても良く、高台寺の紅葉、黄色く色付いた葉、緑の葉、青い空、竹林そして錦鯉のいずれも美しかった。私はこれらすべてを自分のスマホに収めようと写真を撮たくさん撮ったが、それと同時に自分の目で直に見たいという思いも重なり、とにかくせわしなくしていた。座禅の際、ある団員からの質問に答えた住職の言葉はとても印象的だった。修行の際、孤独や寂しさを感じることはありますか、との団員からの質問に対し住職は、寂しさは常に付きものであり、たとえ恋愛中で愛する人が傍に付き添っていても、時に寂しさを感じることもあると答えた。茶道体験では始まりから終わりまでのあらゆる手順において、主人の客人に対する尊重及び客人の主人に対する感謝そして皆の「一期一会」を大切にすることを思いが感じられた。

温泉ホテルでは日本の浴衣を身に着け、その後ホテルの1階で夕食をとった。このホテルには美しい庭園があったが、見学などができなかったのはやや残念であった。それでも懇親会では美味しい日本料理を堪能した他、出し物を披露するなど、皆は一緒に賑やかな談笑の声の中で互いに親睦が深まり、とても幸せで楽しい時間を過ごすことができた。食後私たちは温泉を体験した。これまで教科書の中でしか知り得なかったことを実際に体験できたことはとても貴重であり、驚きと喜びが入り混じった感覚がした。

日 付：11月29日（金）【3日目】

大学名：對外經濟貿易大学

氏 名：肖瑩盈

今日、私は茶道、座禅、高台寺の参観そして箱根温泉といった日本の伝統文化を体験した。

1. 茶道

朝早くから、私は興奮を胸に茶道体験を始めた。茶室は質素且つ古風で、一種の静寂が感じられた。茶道の先生が様々な手順を披露する中で、私たちは抹茶の点て方、飲み方に関する作法を学んだ。全体を通してそれらはとても厳格かつ優雅で、日本の茶文化の魅力を強く感じる事ができた。お茶を飲む際に私は茶の香りもじっくりと味わったが、先生からはまた、茶碗の底に残ったお茶をしっかりと吸い切ることでお茶のおいしさと主人への尊重を示すことができるのお話があった。お茶を飲む前にはおいしいお茶菓子もいただいたが、旺旺の煎餅に近い味がした。その他先生からは、一杯目のお茶は仏様に捧げるものとの説明があった。だが実のところ、中国の茶道は日本の茶道の源である。茶葉は当初中国において発見され薬用そして飲用されていたが、その後次第に独特の文化である茶道に発展していった。そして唐の時代になり中国の茶文化は最盛期を迎え、茶道はこの時期に完成した他、僧侶の渡日に伴い日本に伝わった。日本の茶道は特に茶葉や茶器の使用そして部分的な作法の面で中国の茶道の影響を強く受けている。これには、日本は中国文化の部分的要素を残しているのみならず、そこから独自の文化的・精神的根底を形成していることを私は認識し、5000年の歴史や文化を持つ中国としてはどのように伝統文化と現代文化のバランスを取るべきなのかについて改めて考えさせられた。

2. 座禅

住職の案内の下で私たちは寺院の禅堂を訪れた。室内の日差しは柔らかく、また淡い白檀の香りが立ち込めてい

た。私たちは住職の指示に従い座布団の上に胡坐をかき、両手を組み、目を閉じて、暫しの心の旅を始めた。最初、座禅は自分にとって一種の挑戦であった。私の両脚は座禅を始めて間もなく痺れと痛みで襲われ、背筋を伸ばすことも難しくなった。また心の中の雑念は手綱を切った馬のように制御できず、平静を保つことができなかった。そのため私は呼吸に集中しようと努めたが、様々な考えに邪魔されて集中できずにいた。そこで時間の経過に伴い私は、深く息を吸ってゆっくり吐き出すように呼吸を整え、息の体内での流れを感じるようにした。正念を保ち、辛さや喜びを問わず現在の感覚を受け入れるようにとの住職の声が禅堂内にこだまし、暫しの頑張りの後、私は次第に一種のリズムが見つかり、身体の不快感が和らぎ始め、心も段々と平静を保てるようになった。そして私はこれまでにない静寂を感じ始め、まるで自分が周囲の世界と1つに融合し、すべての悩みや不安が禅堂の空気の中に消え去った気がした。座禅が終わり、私は心の洗礼を受けたかのように大きな満足感と落ち着きを感じた。今回の座禅体験において私は、本当の落ち着きは外界の静けさによるものではなく、心の中の静けさによるものであることをしっかりと認識できた他、日々の慌ただしい生活の中でどのようにひと時の静寂を見つけ、混乱した世界の中でどのように穏やかな心を保つのかを学ぶことができた。今回の体験は今後の自分の人生において貴重な精神的財産になっていくと確信している。

3. 高台寺の参観

午後、私たちは高台寺を訪れた。高台寺は1606年に開創された日本で有名な景勝地である。寺院内の高く聳える歴史ある樹木そして一面の紅葉からは、まるで自分たちが美しい絵巻の中に居るような感覚がした。高台寺は日本の禅宗文化を融合した独特な建築スタイルを採用していて、見るのに夢中になった。

4. 箱根温泉

夕刻、私たちは箱根温泉に到着した。ここは環境がとても優美で、水質も透き通っていて、温泉に浸かると1日の疲れがきれいに取れた。温泉では日本の伝統建築を觀賞しながら、大自然の恵みを体感することができた。今回の箱根温泉での経験を通じて、私は日本の温泉文化に対して強い興味が生まれた。夜に私たちは懇親会を催したが、私たち5大学の団員は正にこの夜から次第に親睦が深まり、親しくなり始めたと思う。

まとめ：

この日、私は日本の伝統文化の魅力を強く感じる事ができた。茶道や座禅から高台寺の参観さらには箱根温泉の体験まで、これらすべてを通して日本文化への知見を深めることができた。今回の旅により私は、文化はコミュニケーションにおける懸け橋であり、お互いの文化を知りそして尊重してこそ、友情が深まり交流が促進されることが分かった。これから先、日本やその他の国の伝統文化について知見を深めることで、自身の人生経験を豊かにしたいと思う。

日 付：11月29日（金）【3日目】

大学名：中国石油大学

氏 名：肖金雪

今日、私たちは悠久の歴史を持つ高台寺を訪れた。高台寺は絵画のような風景を擁する京都にあり、その静けさと多くの文化的要素により数多の観光客を魅了している。高台寺では座禅を体験した。これは古くからある瞑想による修行方法で、静座により心の平静を実現し自己反省することを目的としている。住職の指導の下、私はいかに呼吸を整え、正しい姿勢を保ち、心を今現在に集中させるのかを学んだ。こうした体験を通じて私は、まるですべての悩みや雑念が遥か彼方に消えたかのように心の中の暫しの静寂を感じた。次いで茶道体験に参加した。茶道はお茶を入れる芸術であるのみならず、それ以上に一種の精神的修練そしてマナー文化の表れである。茶室において私は抹茶をいただく際の正しい作法を学んだ。茶碗を温める、茶碗をきれいにする、そして抹茶を点てるといったあらゆる所作には正確さと優雅さが求められるなど、儀式的な緊張感が満ちていた。先生からはこれらの作法の意義及びいかに茶道を通じて根気、尊重そして感謝の心を育むのかについて詳しい説明があった。今回の体験は味覚における享樂であるのみならず、それ以上に心の洗礼であった。

高台寺に別れを告げ、次に私たちは風光明媚な箱根に向かった。箱根は有名な温泉地であり、天然の温泉と美しい自然風景で名高い。そして私たちは山を背に建てられた和風旅館に宿泊することになった。旅館の庭園は非常に

優美で、周囲の自然景観と調和し一体となっていた。そこではまた温かな温泉そして周囲の静寂を堪能し、世界全体が静まり返ったように感じた。庭園は紅葉で埋め尽くされ、色とりどりで、その美しさは息をするのも忘れるほどであった。秋風がそよぎ、葉がゆっくりと舞い落ちる様はこの温泉地に若干の詩的情緒を添えていた。私は他の団員と庭園を散策し、秋の爽やかさと大自然の美しさを堪能した。山上にある神社はまたこの景色に神秘さと荘厳さを添えていた。神社の建築様式は洗練された古風なもので、周囲の自然環境と互いに引き立て合っていた。石段を登っていると、その一步ごとに神様と対話しているように感じるなど、日本文化における自然と神様への畏敬の念を実感することができた。

この日、私は日本の伝統文化の魅力を体験し、座禅における静謐や茶道における優雅さ、温泉や庭園の静けさのいずれからも、心が洗われ昇華するのを感じた。これは個人的に忘れられない体験となった。これらの素晴らしい記憶を心の奥底に留め、次の探求の旅を待ちたい。

日 付：11月30日（土）【4日目】

大学名：清華大学

氏 名：袁嘉惠

今回、自分にとって初めてのホームステイを経験した。実際対面する前に文書で4人のホストファミリーの情報を見た時、とても典型的な家庭だと思った。旦那さんが奥さんより1つ年上で、30歳近くの時にお子さんが生まれ、6歳の男の子と4歳の女の子がいる、これより典型的な家庭はあるだろうか。

豪華なホテルニューオータニで対面した後、私たちは電車で浦和に向かった。そして駅を出るとすぐにサッカーの雰囲気の色濃く感じた。駅近くのサッカー関連ショップ、地上のサッカーボールの装飾、道路沿いの浦和レッズのフラッグは浦和のサッカー文化を示していた。私のホストファザーもサッカーファンで、大学時代にサッカーをしていて、浦和に住むことになったのもこのサッカーの雰囲気の影響を受けたからとのことであった。他のホームステイ先とは異なり、私たちは観光地には全く行かず、彼らの日常生活をリアルに体験した。

お昼は、コスパがとても高い寿司店で食事をし、午後はショッピングセンターを回り、家に戻ってからは近くの公園で子どもらとサッカーや野球をし、それから家に戻り食事の準備をした。その際私はトマトと卵の炒め物を作った。食後は子どもらと色々なゲームで遊び、苦勞しながらも英語とグーグル翻訳で交流した。ここでは私の心は本当の意味で落ち着き、自分の家に戻った感覚がした。一般的な日本人家庭の日常生活について知見を深める、これこそがこの活動の本来の意味なのかもしれない。

日 付：11月30日（土）【4日目】

大学名：清華大学

氏 名：張恒睿

日本には朝に温泉に浸かるという伝統があるが、この日の朝はどうしても起きることができず、しかもスケジュールが迫っていたこともあり、朝の温泉を体験することはできなかった。この日、私たちは東京に移動し、ついにホストファミリーと対面することができた。ホストマザーは吉林省延辺出身で、厦門大学の本科卒業後に日本に留学し、その後日本に留まっている。息子さんは早稲田大学の1年生で、ほとんどの期間を日本で生活しているが、中国語は交流には十分なレベルで、思い出せない単語がある時は英語で交流できた。そのためホストファミリーとは言語的にまったく障害がなく、楽しくおしゃべりすることができた。

ホテルから出発した私たちはまず浅草寺に向かった。浅草寺の建物や風景はとても美しかった。私たちはここで焼き団子を食べた他、おみくじを引き、大吉を引き当てることができた。浅草寺の門の辺りは商店街になっていて、様々な美味しい食べ物や記念品が売られていたが、とにかく人が多かったため、隅々まで見て回ることができなかった。

次いで私たちは東京スカイツリーに向かい、そこではまずスカイツリー傍の商業施設で昼食をとることになった。私は昼食に牛丼を選んだ、というのもこれまで中国で何度も食べていて、日本で本場のものを食べたいと思ったからで

ある。その際、ホストファミリーはまた彼らが気に入っているたこ焼きを買って私に食べさせてくれた。外側はパリッとしていて、箸で少し剥がしてから卵を入れるととても美しかった。その後、私たちはチケットを買いエレベーターでスカイツリーを登った。スカイツリーから東京全体を見下ろすと、たくさんのランドマークを目にすることができるなど、その景色はとても壮観だった。

その後、ホストマザーは用事があるとのことで、私と息子さんは一緒に池袋に行きボウリングをした。この娯楽施設はとても人気があり、番号を受け取ってから1時間待つてようやく遊ぶことができた。後で分かったのだが、ここは息子さんがアルバイトをしている施設の系列店で、この施設では従業員に優先権があるとお客さんに思われないよう自身の勤め先の店を利用するのを禁止しているため、今回わざわざ遠くの店に来たとのことであった。順番を待つ間、私たちはゲームセンターで遊んだ。中国のゲームセンターと比べ、ここにはたくさんのゲームがあった他、遊び方もやや異なっていたなどいずれのゲームも楽しく遊ぶことができた。またボウリングは個人的に苦手だったが、1ゲーム目は驚くべき手の感覚と運で彼に勝つことができた。だが2ゲーム目には化けの皮が剥がれ、あっけなく負けてしまった。

夕食はホストファミリー宅近くのお店で鉄板焼を食べた。そこでは特に和牛が美味しく、食感が非常に良かった他、柔らかく肉汁も溢れていた。食後私たちはスーパーを見て回り、家に戻ってからは暫し語らい、マンション内の自習室で一緒に宿題をするなど、家庭内の雰囲気はとても暖かかった。

日 付：11月30日（土）【4日目】

大学名：北京師範大学

氏 名：楊宇軒

朝食を済ませた私たちは天成園を離れ、バスでホテルニューオータニ東京へ向かった。道中では、ホストファミリーはどういう方々だろうかと考えを巡らせつつ対面への期待に胸が弾んでいた。またバスの中では暫しの日本語学習ブームが起きていた。「ありがとうございます」については皆が数日前に習得していて、今では「初めまして、私は〇〇です。どうぞよろしくお願ひします」のような挨拶を学んでいた。

ホテルニューオータニに到着し私たちはとある部屋に案内された。その部屋にはホストファミリーの皆さんが座っていて、私たちは前の方に立ち、先生から名前を呼ばれた人から順番にホストファミリーと共にホームステイ活動を始めるという流れであった。私は部屋の中を見渡し、誰が私のホストファミリーなのか予想していた。以前のメールでは2人のお子さんがいるとのことで、私は同じ服を着た2人の男の子に目がいき、ひょっとしたら彼らかもしれないと思った。その後先生から「楊宇軒」と名前を呼ばれると、結果はやはり私の予想通りであった。ここ最近連絡を取り合っていた方々と初めて対面することができた。皆さんはとても親切に挨拶してくれて、私は胸を躍らせながら彼らと一緒にホテルを後にした。

彼らは、私がたくさんの風景を見られるように助手席に座らせてくれた。また道中、彼らは様々な建物や風景について熱心に紹介してくれた他、私が理解しやすいように話す速度を抑えてくれていた。

そして私たちはまず浅草寺に向かった。メールで連絡をした際にうどんを食べたいと言っていたため、私たちの最初の目的地はうどん店となった。これまで数日間和食やパンを食べてきた後に熱々の麺を食べた私は涙が出るほど感動した。日本では麺をすする音を出すのはその麺が美味しいことを意味するため、私もそれを真似てすする音を出してみた。食後、私たちはとある屋台の前で福島県の甲冑の体験をし、さらに無料の記念バッジをいただいた。そして寺に入る前に手を洗ったが、寺の中の「神様」が誰なのか実は私にも分かっていなかった。暫く見学した後、皆は常香炉に向かい手を使って煙を自分の身体に浴びせた。ホストファミリーの話では、こうすることでご利益が得られる他、邪気を払うことができるとのことであった。そこでは皆が自身の頭に煙を浴びせ、「頭、頭」と言っていたため、私もそれを真似てみた。その後私たちはおみくじを引き、私と2人のお子さんは吉で、大人2人は凶であった。凶を引いた場合は、そのおみくじを寺院内の特定の場所に結ばなければならず、吉の場合は持ち出すことができた。

浅草寺を後にした私たちはチームラボプラネッツというアートミュージアムを訪れた。ここでは靴や靴下を脱ぎ、空間内の作品群に身体ごと没入し、自身と周囲のアートとの一体感を感じる事ができた。私にはアートの鑑賞力がなく、

わあと驚くことしかできなかつたが、それでもとても楽しむことができた。これもまた設計者が望んでいることだと思う。

その後私たちは車でホストファミリー宅に戻った。道中、私は京都とは異なる高層ビルの他、きれいな街並み、海面、紺碧の空を目にしたが、車内で流れる音楽を聴いていると次第に眠くなった。50分ほど経ち周囲の景色も高い建物から次第に田畑に変わる頃、私たちは家に戻る前にスーパーに立ち寄った。スーパーではたくさんのお菓子の他、鍋の食材を買い、会計を済ませた後2人のお子さんは徒歩で、私たちは車で帰宅した。

ホストファミリーの住まいはとてもきれいな一戸建てで、私の印象の中の日本人の住まいとは異なり、とても大きくモダンな内装であった。まず家の中全体そして私の寝室を案内いただき、それから1階に戻り、皆でドラマ「仁」を観た。その後、鍋の支度を手伝い、大根の皮を剥いた。日本の鍋は中国の火鍋とは大きく異なる。日本の鍋は水中で昆布を煮立たせた後で昆布を取り出しスープとしており、それはほぼ澄んだ水に近い。そこに食材を入れ煮立たせ、火が通ったら取り出し醤油のようなタレにつけて食べる。中国の火鍋のような濃厚さはないが、油っこさがない分さっぱりしていて、とても美味しくたくさん食べる事ができた。食事の際は学校内の話や中日両国の食事の違いなど様々な話題について交流した他、皆に中国語の短い文章を教えるなどしたが、残念ながら夜に外国語のコンテストがあったため、2階に上がりその準備をすることになった。ホストファミリーはコンテストが終わる夜10時過ぎまで私を待ち、飲み物をいれてくれた他、明日向かう秋葉原の紹介をし、さらにはお風呂の準備まで整えていた。彼らにはとても感謝している。

日付：11月30日（土）【4日目】

大学名：中国石油大学

氏名：林星翰

朝早く、私たちは心を込めて選んだお礼の品を手箱の根のホテルを後にし、ホストファミリーと対面すべくホテルニューオータニ東京に向かった。私のホストファザーは年配の方で、外国人留学の橋渡しをする企業に勤めている。偶然だったのは、中国石油大学の聶曉宇先輩も昨年彼のお宅でホームステイしており、これには今回のホームステイに対する私の期待も高まった。私を前にしたホストファザーは嬉しそうに笑顔を見せ、私たちはその場で記念写真を撮った。それから彼は私をかのかの有名な浅草寺に連れて行ってくれた。そこは多くの人でごった返し、香炉の煙が立ち込めていた。私たちは寺の一番奥へお参りに向かい、両手を合わせて願い事をした。浅草寺の荘厳さと静けさからは日本の宗教文化の魅力を感じることができた。次いで、ホストファザーは上野公園の遊覧に連れて行ってくれた。緑の木々が生き茂り、鳥がさえずり、そして花が香るこの場所では日本の環境に優しい文化を身にしみて感じる事ができた。そして私たちは公園内を散策し大自然の恵みを楽しんだ。昼食には本場のお寿司を堪能した。私がこれまで食べていたものと食感がやや違っていたが、これまでにない体験でもあった。

午後、私たちは電車で国立美術館の見学に向かった。美術館内の逸品ぞろいの芸術品に私の視野は大いに広がり、日本のしっかりした文化的根底や芸術の雰囲気を感じることができた。それぞれの作品はまるで感動的な物語を伝えているかのようで、私はそれらの作品にのめり込んだ。夕方、私たちは東京都庁を訪れエレベーターで45階に上った。高い展望室から東京全体を見下ろすと、そこには美しい景色が広がっていた。夕陽に照らされた富士山は非常に壮麗で、私はその景色に魅了された。またこの時、まるで自分がファンタジーの世界に居るよう感じ、とても大きな満足感が得られた。その後ホストファザーの古い友人も来るとのことで、私たちは一緒にホストファザー宅へ向かい夕食をとることになった。夕食はホストファザー手作りの得意料理であるたこ焼きだった。味は本当に美味しく、彼は3回に分けて数十個作ってくれたので、私はお腹いっぱい食べる事ができた。また私たちはビールを飲み、楽しく和やかな雰囲気となった。食事の際はお互いのことそして見聞きしたことについて紹介し合い、日本現地の風土と人情を本当の意味で感じる事ができた。その夜、ホストマザーが客間に布団を敷いてくれた。布団はとても柔らかく快適で、すぐ眠りにつく事ができた。この日の経験は驚き、喜びそして感動に満ちたもので、私は日本に対する知見や認識をより深める事ができた。これから先の日程でより多くの収穫や経験が得られることを願っている。

日 付：12月1日（日）【5日目】

大学名：北京師範大学

氏 名：劉夢楠

楽しい時間は常に短いもので、この日はホームステイ最終日であった。朝 7 時、起床したホストファミリーは 30 分ほど経済ニュースを見て、ホストマザーは 7 時 20 分頃に子どもらと起床した。その後ホストファミリーは朝食の準備を始め、ホストマザーは家事を行い、子どもらは自ら服を着て顔を洗い歯磨きをし、8 時頃に一家全員で朝食をとった。日本の一般家庭の朝食における主食は通常、パンかご飯のどちらかとなっている。彼らの朝食は栄養バランスにとっても配慮されていて、全体的な量はさほど多くはないものの種類が豊富で、特に代表的な「漬物（中国でいうところの塩漬け）」は欠かせないものになっている。その他に「味噌汁」もまた日本人の朝の食卓における常連となっている。日本の小型家電の品質はととても優れていると聞いていたので、私は自分の父親用に「シェーバー」を買う予定だった。朝食を済ませた後、ホストファミリー一家はその「シェーバー」を買うため私を連れバスで品川区の商業施設に向かった。日本のバスは人々が日頃利用する移動手段の 1 つであり、彼らは一般的に Suica を使って交通機関を利用する。バスにはまた専用の観光バスがあり、1 日乗車券を買うことで、バス路線に従い浅草や東京タワー等で観光することができる。こうしたチケットは終日利用が可能のため東京観光に訪れた観光客にとっては非常にありがたい存在であり、またホテルで観光バスの乗車券を直接購入できることから、とても便利である。

売場では「シェーバー」の種類が多かったが、私はラベルや紹介文から大雑把なことしかわからず、ホストファミリーはわざわざ店員さんに各製品の違いについて問い合わせ、それらの長所と短所を私が可能な限り理解できるように伝えてくれた。このプロセスにおいて私は、刃の形状や数によりそれぞれの機能が決まる、また様々な人向けの持ち手が存在するなどの、これまで知らなかった「シェーバー」に関するたくさんの知識を得ることができた。

買い物を終えた後は子どもらと一緒に公園に向かった。そこで私はとても衝撃を受けた。日本は土地が狭いことから都市でも大きな公園は稀であり、私は当初、面積が単に小さいだけで公園を構成するもの自体はそろっていると思っていた。しかし今日訪れた公園は私から言わせれば単に子ども用の遊具が設置された植生のない空き地であったが、驚くことに日本の人々はこれを「公園」と呼んでいた。またそれ以上に驚いたのは、このような何も無い場所でも子どもらがとても楽しそうに遊んでいたことであった。

その後、私たちは天祖神社にお参りに行き、現地の「祭り」を体験した。中国では、大都市（例：北京）においてこのように文化イベントとショッピングの属性を兼ね備え、さらに固定の開催場所を擁する小型の定期市はあまり見かけない。対して日本では、こうした大小様々な神社は数えきれないほど多く、また通常は住宅街近くにあるため、日本の人々の日常生活に多くの利便性と楽しさをもたらしている。

「祭り」を見学し終えた私たちはラーメン屋で昼食をとることになった。そこで私は「中華そば」（訪日前にちょうど中華そばの由来について学んだ）を食べ、その後ホストファミリー宅に一度戻り休憩し、最後に彼らは一緒に電車に乗りホテルまで付き添ってくれた。ホストファミリーの子どもらはわずか 4 歳と 6 歳だったが、どうしても私を見送りたいと言ってくれただけでなく、すすんで私と手をつないでくれた。昨日の彼らの恥ずかしがる様子はまだ記憶に新しかったが、今ではもう自然に私に様々なことを尋ねて交流したり、一緒に遊んだり、私と手をつないで道路を渡るようになっていた。ももちとした子どもらの手のひらからは彼らの温度が感じられ、私の心の中もより一層暖かくなった。

12 月の東京の天気はととても良く、こうした美しい日は本当にお別れには相応しくないと考えた。

日 付：12月1日（日）【5日目】

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：汪婧儀

おそらく前の日に疲れすぎたせいかわ、日頃早起きな私は 9 時近くに目が覚めた。階段を降りるとホストマザーはすでに盛りだくさんの朝食を作り終えていた。彼女の料理の腕前は文句のつけようのないほど素晴らしく、昨日の夕食そして今日の朝食のいずれも手が込んでとても美味しかった。私はそれらを写真に収めたかったが、その一方で写

真を撮るのが申し訳ないという思いもあり、写真に収められなかったのはやや残念であった。だが、私はありったけ食べられたので、私のお腹でこの美味しさを記録したいと思う。

事前のメール連絡で私が公園を散策するのが好きだと知ったホストマザーは、私のためにわざわざ公園のリストを作り、私が行きたい公園を選ばせてくれた。そして客間で娘さんとお別れをし、互いに感謝を伝え、再会を誓い合った。その光景を見たホストファザーは笑いながら「感謝会」のようだと言っていた。

娘さんは期末試験が近く自宅で試験勉強をするとのことで、私はご夫婦と共に美しい稲毛海浜公園に向かった。そこはあらゆる場所が想像通りの夢のような美しさだった。予想外だったのは海辺の歩道からの眺望で、雪に覆われた美しい富士山を眺めることができた。静かな公園内では樹木その他、海岸の景観も楽しめるなどたくさんの見どころがあり、散策やおしゃべりをしながら素敵な午前の時間を過ごした。海風が吹き付けると潮の香を感じ、海鳥が空を飛んでいる。優しいご夫婦と静かで素敵な時間を過ごせたことは、個人的に東京での独特な、忘れ難い、そして大切にしたい思い出となった。

公園内のレストランで食事を済ませた後はすぐに都心に向け出発することになった。ホストファザーは首都高速で車を走らせ、ホストマザーは道中ユニークな場所を見かけると「見て、東京タワーだよ！」といった感じで私に窓の外を見るように知らせてくれた。そのおかげで私は東京のたくさんの名所を目にすることができた。車内で私は間もなくお別れとなる名残惜しさをひそかに覚えつつ、1秒1秒の時間を静かにかみしめることしかできなかった。

その夜パンを食べたくなり、事前に情報を集めていた有名なパン屋を続けて3軒回ったが、どれも売り切れていて無駄足となってしまった。仕方なく早稲田大学近くを散策し、食べたかったイタリアンレストランも満員だったため、さらに歩き回った結果、最終的に沖縄料理のお店でそば定食を食べることになり、そこではさらに泡盛も注文した。以前教科書で見かけた沖縄の特産物が目の前に生き生きと置かれ、お店のご主人はとても温和で優しく、泡盛もとても美味しかった。食後は早稲田大学内の WASEDA-SHOP でワセダベアとその他関連グッズを買いホテルに戻った。こうしてまた幸せな1日に円満なピリオドを打つことができた。

日付：12月1日(日)【5日目】

大学名：対外経済貿易大学

氏名：馬莉姫

今朝は早くに目覚めたが、1階に降りるとホストファザーがすでに食事の準備をしていた。

ホストファミリーの家庭は他の一般的な日本の家庭とはやや異なっていて、ご夫婦共に仕事をしているが、奥さんはさらに学業があるとのことで、家事のほとんどを旦那さんがしていた。

朝食はとても豪華で、焼き魚、卵焼き、チャーハン、豆腐のスープなどテーブルの隅々まで料理が並んでいた他、食後にはフルーツやヨーグルトもあった。私たちはNHKのニュース番組を見ながら食事をし、ニュース内の様々な問題について話し合った。それは普段の家庭の形そのもので、ありきたりながらも幸せであった。そしてホストファザーはまた彼お手製のさつまいものお菓子を持ってきてくれて、それはとても美味しかった。

食後にお茶を飲んでいたら、テレビでは日本が開発したロケットの発射画面が流れ、ご夫婦も立ち上がって画面に近づいて観ていたが、残念なことに発射は失敗に終わった。いずれの国の民衆は皆自分たちの国がより良く発展することを願っている。中国はロケットの発射を何十回としているが、失敗するケースはほとんどないため、現在中国では多くの子どもが「宇宙飛行士」になる夢をもっているということを私はそこでやや自慢げに伝えた。

日本のニュースには1つユニークな点があった。それは中国やアメリカといったそれぞれの分野で発達している国と日本を比較した上で、日本の各分野に存在する問題への批評をしていたことである。日本は国土的にとても小さな国であり、あらゆる面で他をリードするのは困難であるはずなのに、ニュースでは常に自国の各業界を世界トップ基準と比較することで、自身の発展を促していた。こうした点は私自身としても学びそして認識を改めるべき部分だと感じた。

食事を終えた私たちは浅草寺に向かった。ホストファザーはとても博識で、見学中彼は様々な観光スポットの歴史や文化そして由来について教えてくれて、私は多くの知見を得ることができた。彼は仕事では素晴らしいリーダー、生

活では素敵な旦那さん、料理では良いコックさん、そしてとても優れたガイドであった。

私が京都にいた時点で京都の料理は味が薄いということを伝えていたため、昼にホストファザーは東京で150年の歴史を持つ料理店に私を連れて行ってくれた。店内は伝統的な座敷形式を採用していた。また料理にはねぎがたくさん添えられていたなど、メインやデザートを問わず関東の味付けは関西よりもやや濃く、個人的にはこの関東の味付けの方が好みであった。

日付：12月1日(日)【5日目】

大学名：北京語言大学

氏名：李浩楊

今日はホームステイ2日目で、日本に来てから5日目となる。1晩ぐっすり眠れたことで、日本に来てからの数日間で溜まった疲れは完全に吹き飛んだ。そして昨日立てた計画通り、私たちはまず神保町を訪れ、主に書店を何軒か見て回り、そのついでに周辺地域も散策することになった。神保町で私たちは古本を専門に経営している澤口書店、150年以上の歴史を持つ東京堂書店、そして名前を忘れてしまったがチェーン経営の書店を訪れた。3つの書店が重視している点やスタイルはそれぞれ異なっていたが、いずれのお店でもサービス意識や配慮は例外なく優れていた。これらは些細な点に示されていて、例えば澤口書店の店員は私が初めての訪日で、なるべくたくさんの記録を残したいことを知ると、店内で写真撮影をしたいとの私の要望を快く叶えてくれた。また東京堂書店の店員は専用の紙を使いとても丁寧にしっかりと本をラッピングしてくれた。こうしたサービス意識や配慮は従業員に限ったものではなく、店を訪れるお客さんにも自然と浸透していた。澤口書店で本を選んでいる時、私が近づいてくることに気付いた足の不自由なご老人が、私が言うより先に「すみません」と言いながら道を譲ってくれた。これには私自身本当に驚きそして嬉しく思ったと同時に、本好きな人はやはり皆優しいのだとつくづく感じた。

お昼になり、私たちは神保町で有名な馬子禄牛肉面で昼食を取った。この店では牛肉面のスープが本場のものである他、麺の太さやセットメニューを自分で選ぶことができる。こうした点は中国国内でファストフード化された多くの「蘭州拉面」系列店では実現不可能である。1杯のラーメンを思う存分お腹に入れると、慣れ親しんだ味がお腹の中で広がり、先日あまり口に合わなかった日本料理により「傷を負った」胃腸がにわかに活力を取り戻したような気がした。嬉しそうに食べている私を見て、ホストマザーも安堵の笑顔を見せていた。

食後、私たちは引き続き神保町周辺を散策し、しばらくすると御茶ノ水付近の絶景の川に着いた。そこでは重機による都市開発作業を間近で見ることができる他、総武線、中央線、丸ノ内線という3つの電車がビルと川筋との間で1つの画面を構成する素晴らしい景観を目にするチャンスがある。最終的に今回はタイミングの問題で、丸ノ内線と中央線の電車が通過した時の風景をそれぞれ撮影したにとどまり、やや残念だったが、それでも写真には十分に都会的な雰囲気があった。

その後、私たちは秋葉原を散策した。そして私が気になった商品を買おうか迷っていた時、時間はすでに、ホテルに戻らなければいけない午後3時20分になっていた。そのため、残念さと名残惜しさを抱えながらホストマザーと彼女のお母さんにお別れを告げ、急いでホテルに戻り団員らと合流した。

日付：12月2日(月)【6日目】

大学名：清華大学

氏名：邵瑞超

今日の午前、私たちはホテルニューオータニで同ホテルのごみ回収システムそして水処理及び給電システムを見学した。その際私たちは、ホテルニューオータニには独自のごみ回収システムがある他、脱水、生物分解等の方式を通じてホテルで生み出されるすべての生ごみを肥料に変えていることを知った。またさらに、これらの肥料はホテルと契約している農家が購入し、その農家が生産した作物は最終的にホテルの社員食堂用として活用されていた。私は、ホテルニューオータニが20年ほど前からすでにこうしたごみのリサイクルの理念を持っていたこと、そして現在でも全

ホテルの中で別格の存在であることにとても驚いた。こうした点からは、ホテルニューオータニの持続可能な発展及び環境保護への重視そして社会的責任感を感じた。この他、私たちはまたホテルの予備用発電システム及び厨房排水の処理システムを見学した。だが率直に言って、ホテルニューオータニは進んだ環境保護や持続可能な発展の理念を有してはいるが、これらの設備の多くはすでに10年以上使用していることから多少老朽化しており、一部の技術については先進的とは言えなくなっている。そのため将来的にはホテルニューオータニとしてもこうした持続可能な発展の理念を継承すると同時に、時代と共に発展する形で設備に対する更新や高度化を行い、より優れた経済効率及び環境便益を実現することを検討しても良いと思う。

午後、私たちは中華人民共和国駐日本国大使館経済商務処を表敬訪問し、経済商務処の郭参事官と面会した。郭参事官からは近年における中日両国間の貿易状況の他、産業の高度化のプロセスにおける中国企業の成長と日本への投資、及び世界情勢の中日関係への深刻な影響について詳しい紹介があった。こうした紹介を通じて私は、両国の貿易についての知見がより深まったと同時に、中日両国間の「和すれば共に栄え、争えば共に傷つく」という関係性を感じた。だがそれと同時に、目下の中日関係には依然として大きな課題が存在していることも感じた。その1つとして非常に際立っているのは、中日両国間の人員の往来に関し、中国人による日本への観光が多数を占める一方で日本人が中国を訪れるケースは少なくなっており、しかもビジネス目的がメインとなっているという点である。この結果、日本社会における中国社会への理解に多くの偏りをもたらし、それによりまた誤解を生むことにもつながっている。そのため、日本に対するビザ免除政策の実施に伴い、より多くの一般の日本人が中国を訪れ、真に中国を感じ、そして知見を深めることを願っている。そうすることでのみ両国関係の持続的発展と永続的な友好関係が可能になると思う。

夕刻、私たちは著名な住友商事を訪れた。講座形式の紹介により、私たちは住友家の創業のプロセスや住友グループの経営における信用を重んじ、確実を根本理念とし、目先の利益に走らないとの経営モットーの他、自利利他公私一如、将来を見通す及び勇敢に新しいことに取り組むという精神について知見を得ることができた。正にこうした独特な経営の理念やモットーにより、住友グループの企業は成長を続け、現在では日本の経済社会において最も重要なグループの1つとなっている。同社からの紹介を通じてはまた住友商事の多分野におけるグローバルな事業展開及び商社という日本独自の事業形態についても知見を得ることができた。懇親会では住友商事の従業員とより踏み込んだ交流をし、彼らの日本本社及び世界各地での勤務経験について知見を得ることができた。私たちとしても多くの日本人従業員が中国を訪れたことで、中国をより深く知りそして好きになったことをとても嬉しく思っている。この点は両国における民間交流の重要性と必要性を改めて裏付けている。

日 付：12月2日（月）【6日目】

大学名：対外経済貿易大学

氏 名：江嘉鎧

「濯水利山東、濟天下公私一如、前日与祖同」。

「友みたい、命を負いて、いつまでも」。

今日私たちが訪問した企業はフォーチュングローバル500で第12位の住友商事であった。住友商事を訪れる以前、中国には「商社」という形態の企業が存在しないことから、私自身も「商社」の概念について詳しく理解はしていなかった。資料を見た私は当初、住友商事はリソースを統合し工場と消費者の懸け橋となる中間業者の役割を担っていると単純に考えていたが、住友商事への訪問を終えた際には「商社」という言葉に対しより深い知見を得ることができた。

住友商事株式会社の本社ビルに到着するとすぐに、現代風と古風という特徴が共存した建物が印象的に感じられた。この本社ビルは東京の都心に位置しており、外観的にはあでやかな観光スポットと比べると控えめ且つ味わい深いものであったが、私たち一行がゲートから中に入ると、内部の装飾からは木製建築と現代的なシンプルさが融合する様子が感じられ、こうしたスタイルは個人的にこれまで目にすることがないものであった。

広くて明るい会議室で私たち一行は住友商事の代表者らから熱烈な歓迎を受けた。初めに、17世紀に開いた小規模な書店から現在では世界的に有名な総合的企業グループに発展しているという住友グループの悠久の歴史について紹介があった。また住友商事の事業内容（鉄鋼、資源、エネルギー、機械、化学品等多くの分野を含む）の他、それらの世界市場における重要なポジションについて紹介があった。これらの紹介により私は、住友商事が鉄鋼や資源分野で多くの蓄積があり、進んだ採掘技術及び豊富な鉱物資源を擁している他、エネルギー分野では再生可能エネルギーの開発と応用に積極的に携わるなどエネルギー構造の最適化を推し進め、機械及び化学品分野では絶えず技術革新や製品開発を行うことで顧客に高品質の製品やサービスを提供していることを知った。

住友商事の事業内容の紹介において個人的に最も印象的だったのは住友商事の中国政府との提携事業で、具体的には住友商事の山東省政府との水道水の浄化に関する提携事業である。私は山東省生まれで実家は山東省青島市にあり、2011年から私の生活用水の浄化とリサイクルにおいて住友商事の協力があつたことを今回知り、言葉で表すことのできない思いが私の心の中で激しく沸き上がった。住友商事による関わりは私の故郷に進んだ浄水技術をもたらしたのみならず、現地市民の生活の質を大きく高めるものであつた。住友商事の山東省政府との提携は水道水の浄化のみならず、さらに環境保全、エネルギー等多くの分野に及んでいる。こうした全面的な提携は現地の経済発展を促進すると共に、中日両国の友好交流にも大きく貢献するものである。

山東省生まれの私は自分の故郷にこのような提携パートナーがいることを誇りに思っている。住友商事による関わりは私の故郷に進んだ浄水技術をもたらしたのみならず、現地市民の生活の質を大きく高めるものであつた。これから先、住友商事の山東省政府との提携はより深まり、双方の人々により多くの幸福をもたらすと私は確信している。

私の感謝の気持ちを示すため、文頭に自作の俳句をしたためる。こうした提携はビジネス的なもので互いに必要とするからこそのもではあるが、市民生活に恵みをもたらす行いであると言える。

日 付：12月2日（月）【6日目】

大学名：中国石油大学

氏 名：陳依揚

私たちは朝早く起きてホテルニューオータニ屋上のレッドローズガーデンを見学した。巨大なフランス窓の前からは東京全体を見渡すことができ、それはまるでいしへのアメリカ映画『ウォール街』のような光景であつた。その後私たちはホテルスタッフの案内の下、ホテルニューオータニの生ごみ回収施設と排水処理施設を見学した。ホテルニューオータニは流石東京のホテル業界のトップに君臨するだけあって、回収システムの各プロセスを一体とし、リサイクル利用を実現していた。また排水処理施設は発電業務にも関係することから、さらに大きかった。スタッフの紹介では、自家発電した電気はホテル全体の3分の1を賄うことが可能で、もし東京で電力供給に関し不測の事態が発生した場合、ホテル自身の発電能力で最低限の運営を維持することができるのとことであつた。ホテル業界をリードする技術そして一貫した環境保全の精神は私たちにとても強い印象を残した。

設備の見学を終えた後、私たちは同ホテルの日本庭園を訪れた。日本の秋の風景を見る度に改めて驚きを感じ、古典的な滝と紅葉の景観が近代的な非常に高いガラス建築のビルを引き立てている様は格別な趣があつた。その後少し空き時間ができたため、同行の先生は私たちを皇居に連れて行ってくれた。この日は皇居東御苑の開放日ではなかったが、眼鏡橋から内部の宮廷建築を目にすることができ、話によるとここは最も美しいロケ地とのことであつた。ここでは多くの市民が散歩やジョギングをしていた他、高校生やカップル、そして犬を連れた人や青い眼の外国人観光客の姿を目にするなど、広々とした皇居の芝生が東京の幸せの象徴のように見えた。次いで私たちは中華人民共和国駐日本国大使館を表敬訪問することになり、先生曰く「1時間ほどの帰宅」ができるということであつた。大使館では参事官から非常に丁寧な説明があつた他、中日両国は「和すれば共に栄え、争えば共に傷つく」という関係であり、過去の歴史がすでにそれを証明しているとお言葉をいただいた。

住友商事では私たちを迎えるために様々な準備をしていて、初めに長時間の解説を行い、その後中国での勤務経験がある3名の従業員をわざわざ招き、私たちにとっての参考となるよう住友商事入社以後の業務経験などの紹介を

行った。3名ともに親しみやすく、また優れた人材であり、私たちは職業選択や個人のキャリア形成に関し多くを学ぶことができた。中国には「商社」の概念がないため、訪問以前から最も気になっていたのは住友商事であった。そして企業からの紹介を通じて商社について知見を得ることができたが、私たちの知るシステム以外にこうした非常に効率的な運営方式が存在していたことにとっても不思議な思いがした。懇親会は非常に楽しかった。出席した従業員らはいずれも中国語が堪能で、しかも話し上手で喜んで様々な紹介をしてくれたので、本当に多くを学ぶことができた。

日付：12月2日（月）【6日目】

大学名：北京語言大学

氏名：楊思思

日本での6日目は時間が流れる水のようにあっという間に過ぎていった。朝早く私たちはエコ理念で名高いホテルニューオータニの見学を始めた。同ホテルはそのエコ技術及びリサイクルにおける卓越した実績で広く名を知られている。

ホテルスタッフから同ホテルの発電設備に関する詳しい紹介があり、これらの設備は地震等の緊急時にホテルの最低限の運営を維持する電力を供給することができるとのことであった。私たちはまたホテルニューオータニの進んだ排水処理技術について知見を得ることができ、同ホテルでは厨房排水に対し攪拌・沈殿及び微生物処理をすることで油脂を取り除いており、毎日約1000トンもの排水を処理しているとのことであった。

生ごみの処理に関してもホテルニューオータニは同様にその環境保全の姿勢を守っている。生ごみはホテル内で肥料に変えられた後で契約農家が作物の栽培に利用し、それらの作物は最終的にホテルの社員食堂用として戻ってくる。発電機の余熱は生ごみの乾燥に利用され、乾燥後の生ごみは発酵処理により肥料に変わる。肥料に変えられない分解できない物質は無臭の可燃ごみとなり、さらなる圧縮によりレンガに変わり埋め立てに利用されている。金属については処理設備に挟まりやすいことから、ホテルでは各飲食店に対し運搬時は特に注意するよう求めている。ホテルニューオータニでは毎日約5トンの生ごみを処理しており、そこから5万円ほどの収益を得ている。

午後、私たちは中華人民共和国駐日本国大使館経済商務処への「帰省」をし、今回の日本訪問を通じた感想について紹介した。大使館の代表者からは先ず中日両国における経済、貿易及び技術協力といった面における緊密な関係性について紹介があった。中国は日本から進んだ家電製造技術を導入し、また高速鉄道技術についても当初は日本から学んでおり、現在では自動運転、電気自動車、スマートオーダー及びオンライン決済等において大きな発展を遂げている。また日本は省エネ環境保護及び高齢化問題対策において他をリードしており、これらは両国の協力に関し大きな可能性を提供している。しかしながら、中日両国の協力はアメリカの影響を受けており、具体的には次の面に示されている。例えばハイテク分野においては、一部の中核技術に関する交流と共有が阻害され、進んだ技術資料や設備の獲得が困難になっている。また高等教育における協力に関しては、学術交流活動が妨害を受け、共同での学校運営事業の進展が困難になり、学生や学者の相互交流も様々な制約に直面するなど、これらは協力の度合そして範囲に不利な影響をもたらしている。そうした中、中東や中央・南アジア地域では中国と日本には競争関係が存在しているが、中国の機械面の優位性と日本のブランディングを組み合わせ効率の融合を実現することで、ウインウインの局面を作ることが可能である。

次いで、5つの大学の代表者からそれぞれ発言があり、清華大学の代表者は世界文化における日本の影響力を強く指摘すると共に中国文化のPR強化について改めて考えるべきとの意見を述べた。北京師範大学の代表者は慣れ親しんだ・馴染みのない、驚きと喜び・敬服との視点から、日本訪問期間における感想を紹介した。対外経済貿易大学の代表者は文化の保存、日本人の秩序と辛抱強さ、根気よくやり続けるなどの品性から日本に学ぶべき点について紹介した。中国石油大学の代表者は中日両国の教育における違いについて中国として改善すべき点を述べた。そして北京語言大学の代表者は文化保護の視点から、中国はそれらの保護をより強化していく必要がある。日本へ観光に行く中国人の数は800万人に達している一方で中国を訪れる日本人はわずか200万人と、こうした数の不均衡は中国が世界におけるイメージに関して直面している課題を反映したものであり、私たちはこうした隔たりをなくす努

力をする必要があるとの意見を述べた。

その夜、私たちは住友商事を訪れ、同社の企業文化、組織構造そして人間本位の価値観について知見を深めた。「親睦会」では幸いにも素晴らしい日本の友と知り合い、私たちはとても楽しくおしゃべりすることができた。友人をまた増やすことができた私はとても嬉しく思った。

日 付：12月3日（火）【7日目】

大学名：清華大学

氏 名：王婉琳

今日私たちはみずほ銀行を訪問し、松本楼で昼食を取り、そして一橋大学の学生と交流した。みずほ銀行は日本最大の銀行であり世界規模の事業展開をしている。今回私たちと交流したのは主に中国事業を担当している行員だったが、個人的に印象深かったのは、とある女性行員であった。彼女は学生時代に金融ではなく法律を学んでいたが、中日交流の懸け橋になりたいとの夢があり、みずほ銀行が対中事業を強化していることを知り、意を決してみずほ銀行へ入行した。その後、彼女は2度に渡り対中投資業務に携わりたいとの申し出をし、最終的にその願いが叶った。今回の活動の主催者のような機関以外にも、多くの一般の人々が実際の行動により中日交流の懸け橋の構築に努めていることに私は思わず感慨を覚えた。

松本楼は梅屋庄吉氏と孫中山氏の深い友情を受け継いでいる中日友好の証人的存在であり、胡錦濤前国家主席もこの地を訪れている。梅屋庄吉氏と孫中山氏には共通した理想と信念があり、孫中山氏が中国を救うために革命を行いたいことを知った梅屋庄吉氏はためらうことなくその私財を投げうって支援をした。これまで私はこうした歴史を知らなかったが、中国の新生には梅屋庄吉氏と切り離せない関係があることを知った私は、感銘を受けると同時に歴史の多面性についても深く考えさせられた。そしてこの歴史はより多くの中国人そして日本人に知ってもらわなければならない。

一橋大学は商科で名を馳せている大学で、私たちの交流対象は主に中国人留学生又は華僑であった。私たちはそれぞれ自身の背景、生活について交流した他、若者が直面している問題や中日両国に共通した困難について討論し、多くの類似点及び相違点を見つけ、さらに提案を行った。そして最後にお互いに連絡先を交換し長い関係性を打ち立てた。

日 付：12月3日（火）【7日目】

大学名：北京師範大学

氏 名：安懿

今日の午前、私たちはみずほ銀行を訪れ、そこでは私たちの将来的なキャリア開発について役員の方からアドバイスをいただいた。1つめは、自身の状況を踏まえてどこで働くのかを選択する必要があるとの点で、日本の企業は求職者の専攻が合っているかをさほど重視していないため、求職者としては職探しの際に特定の企業に絞る必要はなく、自身の性格や特徴及び好きな職場の雰囲気や踏まえて自分が入りたい企業を選択することができる。2つめは、3つの言語を習得する必要があるとの点で、私たちは日本語をしっかり学ぶと同時に英語能力も高める必要がある。そうすることでグローバル業務に携わる際の競争力が得られる。また、語学力を高めることはハイレベルの認定書を得ることでなく、コミュニケーション能力及び専門分野における語学力を高めることであり、そうすることで言葉の役割を本当の意味で発揮することができると思う。3つめは、自身の特徴や長所を明確にするとの点で、正に多くの日本企業では専攻が合っているかをさほど重視していないため、個人の特徴や長所は特に重要である。この点については個人的にこれまで考えてこなかった部分であり、自身の専攻以外に自分にはどのような長所があり、何をするのに適しているのかを真剣に考え、実際の行動で自身の長所を発揮し、仕事にも応用できるようにする必要があると感じた。4つめは、転職を前提に最初の企業に入社し、最初の数年は経験を積み、それから自分により適した場所で勤務しても構わないとの点で、これは私自身のキャリアプランに関する考え方を変えてくれた。これまで私は、卒業後にあらゆる

面で自分に適した企業に入りたいと思っていたが、これは様々な要素の影響を受けることから明らかに難しいことである。今回このアドバイスを聞いた私は彼の観点到に賛同し、転職は悪いことではなく、人生において順風満帆であることに執着した場合、自身の人生における選択肢を狭めてしまい、人生における成長プロセスを制限してしまうと思った。5つめは、人付き合いや部署運営等に関する基礎知識を学べることから、先に機関内で数年務めてから企業に行くのも悪くはないとの点であった。

この他にも、現在日本の若者は公務員になりたがらないとの話があり、それは本当なのか興味が湧いた私は午後に一橋大学でとある中国人留学生にそのことについて訊いてみた。彼女曰く、比較的安定しているため実際のところは機関内に入りたい人は多いが、中国に比べるとそれほど熱狂しているわけではなく、また機関内に入る人はいずれも非常に優秀とのことで、個人的には彼女の見解に賛同できた。

次いで、みずほ銀行の4名の行員から順に自己紹介があり、さらに私たちとのグループ別の座談会を行った。その中のある男性行員は自己紹介の際に山東省済南市出身と言っていたので、嬉しくなった私は同じく私も同郷ですと伝え、彼はそれでは後ほど改めて交流しましょうと言っていたが、座談会開始当初は彼と同じグループではなく、その後同じグループになった際も彼と席が離れていたため、直接交流する機会がなかった。だが思い掛せず、座談会終了後になんと彼は進んでWeChatの交換をしてくれた。私はとても驚き、また嬉しく思ったと同時に、このような有名企業に勤める人が私のようなちっぽけな大学生のことを思い交流しようとしてくれたことに感動した。彼は私の年齢や専攻、どこの学校なのかを問わず、真の善意と若者と交流したいとの思いから私を対等な人と見なした上で私と接していることを私は感じた。私は彼にとっても感謝している。これから先、私も彼のように自身の地位や経験の如何を問わず、誠実にまた対等に他人と接したいと思う。そして、今後は経験豊富な先輩と知り合うことに尻込みすることのないようにしたい。多くの人は喜んで若者の悩みに答え、そしてサポートをしてくれるのである。

お昼、私たちは日比谷松本楼を訪れ、映像を通じて梅屋庄吉氏が孫中山氏の革命を支援したとの美談について知見を深めることができた。

午後、私たちは一橋大学を訪れ、日本人学生そして中国人留学生と踏み込んだ交流を行った。私たちは互いに多くの質問を提起した他、彼らとの交流を通じて私は日本の大学生活、就職活動及び社会の現状について知見を深めたことで、部分的な従来の印象が変わり、より立体的に日本を知ることができた。

日付：12月3日（火）【7日目】

大学名：北京語言大学

氏名：金百川

7日目、私たちはまず日本の三大銀行の1つであるみずほ銀行を訪れた。みずほ銀行では、中国営業推進部の方と出会い、私は彼の話しぶりから常人とは異なる、成功者特有の自信を感じた。また彼からは、彼自身も中国に興味があり、かつて中国で長年勤務していたとの話があり、個人的にとっても感動した。中国好きな日本人に出会う度に私はとても嬉しくなる。

みずほ銀行の歴史についての簡単な紹介が終わり、日本の三大銀行の中で中国事業を最も重視している銀行であるみずほ銀行は、中国と非常に深いつながりや関わりを持っていることを私たちは知った。その後、彼は私たちに自らの経験から5つのアドバイスを授け、それらのいずれからも多くの収穫が得られた他、それ以上に私たちの視野が広がった。例えば、彼からは日本における就職活動の基本状況について紹介があり、日本では就職の際に学習成績をさほど重視せず、人としての能力を重視している。勤務において必要な技能は入社後に改めて育成するため、日本では1つの会社で定年まで勤め上げる人も少なからずいるとのことであった。だが彼はそれを薦めず、私たちに転職することを率直に薦めた。最初の企業で数年間経験を積み、それからより良い企業に転職する、こうすることで能力の向上や視野の拡大に役立つ他、それ以上に大きな実績を挙げることができるとのことであった。その他のアドバイスに関しては、彼からは外国語の習得がとても重要で、3つの言語を習得することで人材市場において優位性を持つことができるとのことであった。

お昼、私たちはみずほ銀行に別れを告げ日比谷松本楼で昼食を取るようになった。そこでは中日友好に関する美談について知見を深めた。辛亥革命を起こした人物である孫中山氏の日本の友人として梅屋庄吉氏は、孫中山氏の革命活動を終始支援し続け、彼のために私財を投げうって資金援助をした。また日比谷松本楼は孫中山氏と宋慶齡女史の結婚式の場となっている。このお話を通じて私たちは、中日友好は終始続いており、この時代の中日友好を今後も継続し発展させていく重責は私たち新時代の大学生が担っていることを自覚した。

その後、私たちは今回の活動で2校目となる一橋大学を訪問した。日本で有名なトップレベルの学校である一橋大学は街の中心部からやや離れた場所にあったが、周囲の環境はとても美しかった。イチョウと秋の日の舞い散る葉そして彩りを添える紅葉、これらすべてが日本の風情を醸し出していた。私たちは一橋大学の学生の案内の下、同大学の講堂や図書館を見学し、日本の学生が学習に励んでいる様子を目の当たりにした他、卒業写真の撮影をしている卒業を控えた学生らの姿も見かけた。夜の懇親会は非常にスムーズで、私たちは現在各国の若者が直面している問題や課題について一橋大学の学生と意見交換をした。この交流を通じて私たちは彼らと深い友情を育むことができ、とても嬉しかった。

日 付：12月4日（水）【8日目】

大学名：中国石油大学

氏 名：王毅竜

旅の終わりが静かに近づくに伴い、私たちは日本への深い愛着を抱えながら最後の企業見学となるソニーを訪れた。ソニーは1946年5月に創業したテクノロジーの巨頭であり、その比類なき創意と最先端技術により、尽きない感動と喜びを世界に届けている。

ソニーの社屋に足を踏み入れると、私たちはまるで未来感に満ちたテクノロジーの殿堂を訪れたような気がした。展示エリアは撮影禁止だったが、様々な最新テクノロジー製品を直に体験できた私たちはとても心が躍った。ハイレベルで精密且つ先端的なハードウェアから様々な多岐にわたるコンテンツサービスまで、ソニーは13兆208億円という膨大な売上高によりその強大な実力を世界に示している。そして11万3000名の従業員の知恵と汗は、ソニーの今日の輝きを共に作り出している。

ソニーにおいて私たちは「input output 改善」との考え方及びそれを業務に運用する卓越した能力を強く感じた。ソニーは常に戦略の方向性を調整し、ハードウェア製造からコンテンツサービスへの転換をすると共に、予測の範囲内で絶えず卓越を追求するなどモデルチェンジを成功させている。ソニーは事業開発担当者に対し全体のプロセスを学び理解するための大きな舞台を提供しており、従業員が実践を通じて事業の発展を推し進めることを奨励している。運や試行錯誤に伴うコストはイノベーションのプロセスにおいて避けられないものであるが、ソニーは終始ポジティブさを持ち続け勇敢に進んでいる。

見学終了後、私たちはソニーへの敬意と名残惜しさを胸にホテルニューオータニに戻り、心温まる感動的なお別れのセレモニーに参加した。私たちのホストファミリー、そして日本側の関係者の皆さんが時間通り会場に到着し、この忘れ難い時間を共に過ごした。私はリードとして団員の皆と『遇見』を歌い、その歌声には今回の経験に対する思いと感謝が満ちていた。そして美食を楽しんだ後、私たちはしみじみとした思いでホストファミリー、日本側の関係者の皆さんとお別れをし、心の中は名残惜しさでいっぱいだった。

そして私たちは全日空NH963便に搭乗し、羽田空港からゆっくり飛び立ち帰国の途に就いた。飛行機が雲の層を通り抜けている時、私たちの心の中は感謝と名残惜しさに満ちていた。今回の旅は終わったが、中日両国間の友情と交流は永遠に続いていくことを私たちは知っている。

たくさんの収穫と感動を胸に、私たちは祖国に戻った。今回の旅を通じて私たちは日本の魅力を知ることができたのみならず、それ以上に中日両国の人々との深い友情を強く感じることもできた。今後、私たちは引き続き開放的且つ寛容的な心を守りながら中日両国の友好交流に自らの力を捧げたいと思う。

日 付：12月4日（水）【8日目】

大学名：北京語言大学

氏 名：鄭小芳

見学企業の最後はソニーであった。やはりフィナーレを飾るだけあって一味違って、初めにギャラリーの入口で宣伝映像を観る際、皆は隣の小さな入口がギャラリーの入口だと思っていたが、映像が終了しスクリーンが真ん中から分かれた瞬間、皆は思わず歓声を上げた。これまで多くの日本の優秀な企業を訪れてきたが、ソニーの登場の仕方はやはり個人的にとっても印象深かった。

そして解説の女性が私たちを連れ、ソニーが生み出してきた多くのハイレベルで精密且つ先進的な製品を紹介してくれた。その中には、昔からあるソニーの代表的なオーディオビジュアル製品の他、スポーツ等の分野において生み出した新製品もあった。だが個人的に最も興味を引かれたのはやはりあちこち動く aibo であった。これまで授業やネット上で関連の報道を見聞きしたことはあったが、実際にこの可愛い犬を目にして直にその体温を感じるといった体験はやはり大きく違うもので、本当に衝撃を受けた。元々ゲームやテクノロジーといったものにあまり興味がなかった私ですら、知らぬ間にテクノロジーで世界を変え、世界をより良くするとの思いが心に芽生えた。こうした影響力に私はソニーという企業の活力と生命力を感じた。これで企業訪問はすべて終了したが、個人的に最も気に入った日本企業を1社選ぶとすれば迷うことなくソニーを選ぶと思う。

最後のお別れのセレモニーでは、私のホストファミリー全員が会場に足を運んでくれた。ホストファザー、ホストマザーそして娘さんたちは皆お休みを取って私の見送りに来てくれたことを私は知っていて、特に多くの団員のホストファミリーが様々な都合で来られなかったことから、彼らがわざわざ遠路はるばる見送りに来てくれたことに、私は本当にとても感動した。今回の活動はこれで一段落つくことになるが、これが最後の対面ではない。中島さんがお別れの際に言っていたように中日両国は一衣帯水の隣国であり、飛行機でわずか3時間ほどの距離しかなく、空間的距離はこれまでもこれからも近いままである。私たちがすべきは、両国の人々の心の距離を引き続き近づけ、これまで存在していた誤解という壁をなくし、お互いの住む場所をお互いの陽の光と温かさで包むことである。時間は十分にある、再会の日を楽しみにしている。